

鈴木一彦 提出 学位申請論文（課程博士）

『大祓詞の研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は「大祓詞の研究」と題して、前半は「大祓詞」（ないしは「中臣祓」「中臣祭文」「中臣祓詞」と呼称される）の成立過程を、後半部は「大祓詞」の宗教的意義や役割について考察したものである。「序章」において、「一、研究の目的と意義」「二、先行研究の課題」「三、本研究の概要」について述べている。以下各章ごとに要約する。

第一章は「大殿祭の祝詞と大祓詞」と題し、「大祓詞」の成立過程を推考しようとした。「中臣祓」の最古の注釈書と言われる『中臣祓訓解』には「中臣祓」

を「(国中に成り出でむ) 天の益人等が」の前後で二段に分けるといふ解釈がみられ、近世の古学神道(国学)家における「大祓詞」の注釈書の一部でも採用されている。同書にはその前半部は「大殿祭の祝詞」の影響によって作成され、後半は「天津祝詞」と呼ばれていたという記述もみえる。『中臣祓訓解』に見られる以上のような見解が、「大祓詞」の成立過程に当てはまるかどうかを検討し、論者はその可能性を指摘している。また青木紀元氏の「大祓詞の構造と成立過程」に主張されている「高天原に神留り坐す」から「かく聞こし食しては(中略)罪」と云ふ罪は在らじ」までの箇所が、「大祓詞」本文中最古という説を参考にして、『皇太神宮儀式帳』の「祓の法」と内容が重なることを指摘し、「大祓詞」の成立の一端が推考されると主張する。

第二章「『祓の法』と大祓詞」では、前章に引き続いて「大祓詞」の成立過程を検討。『皇太神宮儀式帳』の「祓の法」と『倭姫命世記』にみえる「祓の法」を比較すると、類似点も多いが相違もみられる。前者の「祓の法」は宣読体形式

の祝詞になっっているが、後者のそれは奏上体形式の祝詞である。そして両者と「大祓詞」とを比べると、天つ罪の項目は同一であるが、国つ罪には二ヶ所ほどの違いがみられる。しかしその相違点は、「大殿祭の祝詞」に記載されている「はふ虫の災」や「飛ぶ鳥の禍」を付け加えることで、「大祓詞」の国つ罪と一体となり解消される。

以上のことを勘案すると、神宮三節祭にあたり種々の罪穢れを申告し明らかにして祓を行うと言われる『皇太神宮儀式帳』に規定されている「身祓（みそぎ）」や、「天つ罪国つ罪」など過ちを犯した人を祓い清める「祓の法」などを基にして、まず奏上体形式の祓詞が形成された。その後それが『倭姫命世記』にみられるような宣読体形式の祓詞になり、やがて『延喜式』所収の「大祓詞」や『朝野群載』における「中臣祭文」へ整えられていったと推論している。

第三章「祓詞の尊崇にみる神道思想」においては、「大祓詞」や「中臣祓」が実践的に用いられる際に創出された宗教性を究明するために、「生命主義的救済

観」に注目。これは新宗教の共通的特徴を抽出する際に提唱されたものであるが、神道のような伝統宗教を分析するのにも応用可能と主張する。禊祓とは「むすひの働きを疎外する罪穢れから人間の生命力を回復させるための呪術」という先行学説を肯定し、「神道における始原的本質の一つとしての呪術的宗教性」と規定。二季恒例の大祓の背景にある思想も、このような呪術的宗教性であると指摘している。

十一世紀以降、奏上体形式の「中臣祓」を用いた個人祈願が、陰陽師によって担われ、平安末期には両部神道書『中臣祓訓解』の祖本が成立。この中で「中臣祓」を、神仏の恵みや苦しみからの救済を約束する、呪術的な祝詞と解釈している。仏教の「如来蔵・自性清浄」の思想に基づいて、「中臣祓」によって心が清浄になるという別な機能も強調された。このような考えは、中世の伊勢神道や吉田神道の「中臣祓」注釈書にも受け継がれ、近世においても朱子学の影響もあって、垂加神道家は「中臣祓」を「神人合一」を目的とする修業方法の一つとして

尊重した。しかし近世の伊勢神道家や古学神道家は、心を清浄にするとか「神人合一」のための祓という考えを否定し、専ら身体の穢れを祓うことを主張したという。ただし、古学神道家の中でも平田篤胤は「大祓詞」の宗教性を強調し、「大祓詞」の中ほどにある「天津祝詞の太祝詞事を宣れ」の「天津祝詞」は「大祓詞」と別な祝詞があったとして、その復元を試みたと指摘する。続いて近世に創唱された新宗教団・金光教を取上げ、教祖・金光大神の信仰形成上「六根清浄」や「大祓詞」が果たした重要な役割、および近代の新宗教の「呪術的宗教性」に、この祓詞との関わりから生じる信仰があったことを論述している。

第四章「日本の近代化と大祓詞」では、日本の近代化において「大祓詞」が果たした役割を中心に論じる。「大祓詞」における「天津祝詞」については、平安末期以来の諸注釈書において見解が大きく二つに分れていた。すなわち「天津祝詞」とは、「大祓詞」と別に存在するのか、それとも「大祓詞」そのものを指すのかの問題である。近世の伊勢神道家・度会延佳によって「天津祝詞」は「大祓

詞」ないしは「中臣祓」を指すという主張がなされ、古学神道家のほとんどがそれに同調。第二次世界大戦後は、この学説がほぼ定説となった。その中で平田篤胤は「天津祝詞」は別な存在という立場からその復元を試み、「天津祝詞」と称して提唱したのが、近代以降修祓の際に用いられている現行の「祓詞」である。

一方金光教においては、明治三十年（一八九七）神社祭式に準拠するかたちで教団の祭式が制定された。修祓に際しては、「大祓詞」を奏上すると規定し、神社祭式や他の教団に見られない扱いをした。「大祓詞」は「中臣祓」とも言われ、「中臣」とは君と臣下または神と君との中を執り持つ職であり、金光教における「取次」も天地金乃神と人との間を取り次ぐ意味があることから、両者に信仰的に共鳴する要素があったという。しかし第二次大戦後は、教団の脱神道化もあって、教祖の信仰と修祓という贖罪の思想とは相容れないという理由で廃止され、新たな拝詞が制定された。

近代における「大祓詞」については、古典の実証的研究を通して神道における

「始原的本質としての呪術的宗教性」に回帰して行く流れと、もう一つは「神人合一」といった祓の思想を更新させ民衆救済のための新たな呪術的宗教性」を構築しようとする流れがあった。この二つの流れの緊張関係と相乗効果によって創出された呪術的宗教性が、日本の近代化を促した要因の一つになったと結ぶ。

「終章」では、各章の概要を記述している。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、第一章「大殿祭の祝詞と大祓詞」・第二章『祓の法』と大祓詞」において、「大祓詞」（ないし『中臣祓』という）の成立過程を中心に考察し、第三章「祓詞の尊崇にみる神道思想」・第四章「日本の近代化と大祓詞」においては、「大祓詞」の宗教的意義や役割について論じたものである。

「大祓詞」とは、神道史上たいへん重要な古典の一つと言える。平安時代末期

に祖本が成立したと推測される『中臣祓訓解』、中世の吉田兼俱・近世の山崎闇斎・賀茂真淵・本居宣長らをはじめとする数多くの注釈書が残されている。また神道祭儀の上でも、八世紀頃に遡る時代から今日まで、二季恒例の大祓式が行われており、その都度「大祓詞」が用いられたと言われる。それだけに「大祓詞」をどのように研究するか、方法論的にも容易ではなかったと思われる。前述したように論者は、「大祓詞」の成立過程の究明と宗教的意義や役割について、という二つの視点から接近しようとした。

第一章・第二章において、「大祓詞」の成立過程を以下のように推論している。「大祓詞」の注釈書を蒐集・出版した『大祓詞注釈大成』（上・中・下三巻）を精読し、近・現代における「大祓詞」の先行研究を踏まえ考察。その結果、「大祓詞」の中ほどにみえる「（国中に成り出でむ）天之益人等が」前後を中間点にすると、前半部は「大殿祭の祝詞」による影響が顕著にみられ、後半部分は神宮の三節祭に臨むにあたり罪穢れの祓を行う『皇太神宮儀式帳』の「身祓（みそぎ）」



および同じ『儀式帳』にみえる「祓の法」などを基に成立したと推考している。 「大祓詞」と『皇太神宮儀式帳』や『倭姫命世記』の当該箇所を丹念に比較検討した結果の推論であり、全面的に否定するつもりはない。「延喜式」所収の「大祓詞」の成立は延長五年（九二七）以前であり、『皇太神宮儀式帳』は延暦二十三年（八〇四）朝廷への報告書であるから、『儀式帳』の「身祓」や「祓の法」を基に「大祓詞」が作成されたという推論は成り立つ。しかし「大祓詞」の成立を七ないし八世紀に遡るといふ説もありそれを認めると、両者の先後関係に問題が生じる。また仮に『皇太神宮儀式帳』の「身祓」や「祓いの法」が「大祓詞」形成に影響を与えたとすると、その歴史的背景が如何なるものであったか、大きな課題となろう。いずれにしても、説得力のある論拠が要請される。

第三章および第四章においては、「大祓詞」の宗教的意義や役割を究明するた  
めに、「生命主義的救済観」に基づいた「呪術的宗教性」に着目。「大祓詞」の諸  
注釈書にみえる思想や先行学説の主張を検討し、以下のような点を指摘する。第

一に『古事記』『日本書紀』記載の禊祓や二季恒例の大祓式に窺える思想を「むすひの働きを阻害する罪穢れから人間の生命力を回復させる」役割と捉えたこと。第二に中世の伊勢神道や吉田神道では「大祓詞」によって心を清浄に保ち、天地万物と一体となって所願が成就するなどの意義を強調し、近世の垂加神道においては、「神人合一」の手段として「大祓詞」の役割が提唱された。第三に近世の古学神道家は「大祓詞」による心の清浄や「神人合一」などの手段であることを否定し、専ら身体の穢れを取除くことを主張。しかし古学神道家の中でも平田篤胤は「大祓詞」の役割を、身体の清めだけでは不十分と批判した。「大祓詞」にみえる「天津祝詞」とは、「大祓詞」そのものを指すのではなく別に存在していたと推測し、「天津祝詞」の復元を試み、「大祓詞」がもつ救済力を宗教的意義として強調する。篤胤の「大祓詞」に対するこのような理解が、金光教教祖の信仰形成の一要因になったこと、あるいは金光教団が明治三十年（一八九七）に篤胤作成の「天津祝詞」や「大祓詞」を教団の祭儀に採用した根拠になっていること

などを推論している。

なお平田篤胤の「天津祝詞」の復元は、近代の神社祭式に影響を与えたことにも言及する。神社の祭儀において行われる修祓の際に唱えられる「祓詞」は、篤胤の復元した「天津祝詞」とほぼ同内容である。ところが「天津祝詞」は篤胤が主張したように別なものがあつたのではなく、「大祓詞」そのものを指すという見解が、第二次大戦後定説化しつつあるという。とすれば篤胤が「天津祝詞」と推考して復元した祝詞を、そのまま「祓詞」として使用することに問題が生じる。そこで論者は先行学説を踏まえながら、伊邪那岐命の「美曾岐祓」の文脈から捉え直すことで理解すべきことを主張する。おわりに、「日本の近代化」と「大祓詞」が有する宗教的役割との関わりについて論述し、「祓の思想を更新させ民衆救済のための新たな呪術的宗教」の創出を指摘し結んでいる。

以上、「大祓詞」の諸注釈書を精読し先行研究の業績を参考にしながら、「生命的救世観」に基づいた「呪術的宗教性」をキーワードに、「大祓詞」の宗教

的意義や役割を明らかにしようとした。これまで「大祓詞」の歴史的研究は少ないが、宗教的意義や役割に焦点を当てて総括的に捉えた研究は多いと言えず、たいへん有意義な研究と評価できよう。ただし「日本の近代化」と「大祓詞」との関わりについては、「近代化」そのものの概念規定があいまいであり、「近代化」のどのような面に、「大祓詞」の救済力が発揮されるのかなどの課題についての考察が望まれる。第一章・第二章において指摘した課題同様、今後更なる研究が必要と思われるが、本論文を総合的に判断すると、本論文の提出者鈴木一彦氏は博士（宗教学）の学位を授与される資格があると認められる。

平成二十三年二月十八日

主査	國學院大學教授	安蘇谷 正彦	Ⓔ
副査	國學院大學教授	岡田 莊司	Ⓔ
副査	國學院大學教授	中西 正幸	Ⓔ

鈴木一彦 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試問を行った結果、博士（宗教学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十二年十二月十五日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	安蘇谷 正彦	印
副査	國學院大學教授	岡田 莊司	印
副査	國學院大學教授	中西 正幸	印